Tsukuba Psychological Research
1989, 11, 57-64

「青年」ということばの由来をめぐって

筑波大学心理学系　加藤　隆勝

筑波大学研究生　森下　由美[1]

On the source of the Japanese word "seinen"

Takakatsu Kato and Yumi Morishita (*Institute of Psychology*, *University of Tsukuba*, *Tsukuba*, 305, *Japan*)

According to T. Nara's "History of the Japanese Y.M.C.A.", the Japanese word "seinen" originated with the establishment of the Tokyo Y.M.C.A. in 1880, which created the term as a translation for "young men". Nara's findings later proved incorrect, however, when use of the word "seinen" by Confucianists of the late Edo period, such as Toko Fujita (1806-1855), was confirmed. This study attempted to clarify two points : (1) Was the word "seinen" actually used in the early Meiji period ? (2) If so, what type of meaning did it carry ? For the study, periodicals and newspapers from the early Meiji period were examined. (1) Yukichi Fukuzawa used the word "seinen" in his "Gakumon no Susume" (The Encouragement of Learning) in 1874. (2) The word appeared in "Kyoiku Zasshi" (Education Journal) published by the Ministry of Education in 1876 as a translation of "youth." (3) A news paper, Tokyo Nichinichi Shinbun, repeatedly used the word in 1879. Further, it was infered that the word "seinen" implied a new life style of youth which was different from the tradition-oriented life of young people in the Edo period.

Key words : Japanese word "seinen", source, meaning, early Meiji period

問　題

日本語の「青年」ということばが，いつ頃から，どのように用いられてきたかは，青年研究者の興味をそそる問題である．

研究者の間には，青年ということばは，歴史的にみてそれほど古いものではないという認識があるが，これまでに「青年」の由来に直接触れたものとしては，「日本YMCA史」(奈良，1959) の記述がある．それによると明治13年に東京で日本最初のYMCA（東京基督教徒青年会）が創立されるさい，創立者の１人で，初代会長でもあった小崎弘道がyoung menの訳として青年ということばを創案したとしている．「日本YMCA史」の記述を引用すると次のようになる．

「『青年』という言葉は今日ひろく一般に用いられているが，小崎弘道によれば，その言葉を創案したのは小崎自身であり，YMCAの訳語として日本で初めてつくられた新語であった．YMCAは今日いわゆる『青少年団体』として重きをなしているが，文字通りその先駆であったことは意義深いことである．」(奈良，1959，５)

同書ではさらに，「田川大吉郎『社会改良史論』(542頁）によれば，唐詩選に『宿昔青雲志蹉跎白髪年』とあるが，その『青雲』の字に因んで『青年』としたと小崎弘道が述懐していた」(奈良，1959，５）ことを紹介している．

以上の記述は，教育学者らによってもわが国における青年の概念の出現として引用されている（たとえば，小川・倉内，1972)．

ところが，日本YMCA同盟発行の新聞「THE YMCA」の1977年６月１日号には，百年史こぼれ話

1　現在の所属は東京都労働経済局商工部

として，「『青年』はYの新造語ではない」という，次のような記事が掲載されている．

「最近，調べた資料によると，小崎弘道以前に『青年』という言葉が使われていた．すなわち，湯浅与三著『小崎弘道先生の生涯』（湯浅与三氏は京都Y理事長湯浅八郎氏の弟）によると，『ヤングマンを訳すとき中国では少年と訳している．しかし少年では面白くない．青雲の志を抱くものとして小崎氏はこれを青年と訳した．そして広く用いられ，今日では中国にさえ逆輸入されている．小崎氏にしてみればこれは全く自分の創見と考えたことであろうが，必ずしもそうではなかった．例えば安政2年（小崎氏誕生の前年）江戸の大地震で圧死した藤田東湖の詩を見ると，自分の年若かった頃を顧みて青年と言っている』とある。
……（中略）……
こうしてみると，『青年』は東湖以前にもあったのではなかろうか，という疑問が生じてくる．『少年老い易く』，『盛年重ねて来らず』，『青雲の志を抱きて』という言葉ほど有名ではなかったにしろ……。
とまれ，しかし言葉の詮索はいまそれほど重要ではない．
小崎は東湖の詩を知らず，また，『青年』は当時の『辞書』にもなかったので，自ら苦心の末，『青年』という言葉を考えついたのである．そしてYMCAは，その運動の拡大，発展とともに，『青年』を日本の社会，近代国語の中に位置づけてきたのである．」

この記事は無署名であるが，日本YMCA同盟の落合則男によるものである．同氏はこの点を後の論考で，以下のようにさらに詳しく記述している．

「今日，『青年』という言葉は，そのとき小崎弘道が造語した，まったく新しい言葉で，YMCAとともに生まれたとされている（小崎弘道『自叙伝』）．しかし，新しい造語というのは間違いで，すでに明朝の王世貞の詩，幕末の儒者藤田東湖の漢詩，康熙帝時代の『佩文韻府』などに表われていた．さらに最も近い時代では，明治10年設立の華族学校（学習院）の寄宿舎を『青年舎』と名づけており，明治11年刊の前述した『米欧回覧実記』にもニューヨークYMCA見学のところに『青年』が使われていた．さらにわれわれのキリスト教史にとって，もっとも近しい『七一雑報』の明治11年9月20日号には，弘前教会の近況を伝える中で『……会員は大半……青年書生にて……』と記されているのである．
創立者の1人である植村正久も早くからこれに気づき，自分たちの創作だと思っていたが，ひとから注意されて，『目っ駄な事』をいうものではないと自戒している（『日本の青年』明治37年5月号）．」（落合則男，1984，65-66）

このように，「青年」が小崎弘道による新造語であるという説は，YMCA自身によって否定されている．

また，国語学者佐藤喜代治は，前述の「日本YMCA史」および「THE YMCA」の記述を紹介した上で，「青年」の語史としては来歴をさらに究明しておくべきとして，YMCA創立以前の「青年」の用例について解説している（佐藤，1977）．そこでは藤田東湖と同時期の中島棕隠の詩にも青年が用いられていること，また明治6年に刊行された「附音挿図英和字彙」ではyouthを「青年（トシワカ），後生，少年」と訳し，この辞書を増補した「増補訂正英和字彙」（明治15年）では，青年に振り仮名が無くなっていることに注目している．これらのことを通して，佐藤は次のように指摘している．

「中国でも日本でも少くも近世以降『青年』という語が用いられてはいるが，その用例はむしろまれであると言っていい．従って，以前の用例を知らずに，新たに用い始めることはあり得べき事実である．従ってまた，現代日常の漢語が始めて使用された時期がいつであるかを一概に決めるということもできない．かつ，中国で初め『青年』という語を用いたときは，『儒林外史』の例にも見られるように，未熟な者という語感がつきまとっていたのではないかと思うが，小崎弘道が『青年』という語を用い始めたときは，『青雲』あるいは『青春』を連想して，若々しいという感じを抱いたので，よほどニュアンスが違っていたのではあるまいか．』（佐藤 1977，3）

また，くだけた俗語を付して注解の役目を果たしていた振り仮名は，漢語漢字を中心とする傾向が強くなるにつれて消えていったもので，「『青年』について言えば，『年若』では名詞として落着かず，『青年』が在来の『若者』よりも新鮮な響きをもつものとして迎えられたのであろう」（佐藤，1977，3）と考察されている．佐藤の，このような優れた分析により，われわれは「青年」という語が俗語を押さえて一般に普及していく過程を理解することができる．

ただし，佐藤の分析では，藤田東湖，中島棕隠以後YMCAの創立に至るまでの間，「青年」という語の使用はほとんどなかったと解されている．わずかに明治6年刊行の「附音挿図英和字彙」の例があげられているにすぎない．国立国語研究所では，明治10年11月

から1年間の「郵便報知新聞」の用語を調査して発表している（国立国語研究所，1959）が，佐藤はそこに「青年」という語が全く見られないことから，明治10年にもまだ流布するに至らなかったものと推測している．青年心理研究者もこの論に拠っていることが多い（徳田，1982；落合良行，1987）

しかし，落合則男（1984）が指摘しているように，明治10年頃には数は多いといえないが，「青年」という語が一般に用いられていた例が見られる．したがって明治10年以前にも「青年」が用いられていた可能性は十分考えられる．

この点をわれわれは明治初期の新聞，雑誌等の分析や，若者組に代わって青年夜学会や青年会が成立してくる時期等の分析によって検討してきた．本稿は，それらの資料をもとに，明治の初年からYMCA創立前後に至る時期において，青年ということばがどのように用いられていたかを明らかにし，その由来についての見解を整理することを意図したものである．

なお，「わが国で青年という言葉が最初に使われたのは，福島県の自由民権運動家たちによってである．……（中略）……明治12•13年にかけてのことであった．」（大串，1973）という指摘もある．以下の検討は，これらの説の当否についての検討にもなるであろう．

明治初期の雑誌等に見られる「青年」

最初に，繰り返しになるが，明治以前にも「青年」ということばの使用例がみられることを確認しておきたい．

諸橋轍次の「大漢和辞典」には，「青年妙齢」の項があって，「年がわかいこと．妙齢は少年の義．」（諸橋，1959，12710）とあり，幕末の儒者鹽谷宕陰（1809—1876）の「遊墨水記」の中から次の用例をあげている．

大率青年妙齢，前途萬里，皆邦家之英也．

これは青年の前途を称えた詩である．望月（1956）も，青年ということばを最初に用いた人として鹽谷宕陰をあげている．

また，前述の藤田東湖（1806—1855）の詩句「青年此地嘗激遊」のほか，「日本国語大辞典」（日本大辞典刊行会，1974）では中島棕隠（1779—1855）の「水流雲在楼集」の中の用例があげられている．いずれも同時期の儒者であり，わが国でも幕末にはすでに青年ということばが用いられていたことを示している．

なお，「大漢和辞典」では「青年」の項に中国明代の詩人王世貞（1526—1590）の詩

若過長沙応大笑，不将憔悴送青年．

があげられている．中国においてもこの詩が「青年」の最初の使用例とされているようである[2]．

次に，われわれが明治初期の雑誌について青年という語の有無を調べた結果について報告する．対象となった雑誌は筑波大学中央図書館所蔵のもので，「教育雑誌」（文部省印行，明治9年～15年）および「明六雑誌」（明六社刊，明治7年4月～8年11月）に「青年」の語が見出された．

「教育雑誌」は内外の教育に関する方法，論説等を収めて，広く啓蒙を図ろうとしたもので，欧米の論説等の翻訳紹介なども多く掲載されている．明治9年10月発行の第18号には四屋純三郎訳の「マンスフキルド氏米国教育論抄」が紹介されており，「教師の栄誉」を論じた節に次の文がある．

「人世何等ノ事業カ教師ノ職務ヨリ偉ナルモノアランヤ其永久ニ伝フベキ之ヲフキヂアス及アンゲロノ如キ技術家ノ成績ニ比センカ彼等ハ無生寒冷ニシテ必腐朽スベキ大理石ヨリ之ヲ造成シ教師ハ即平常新鮮永世不朽ノ人心ヲ誘導シ殊ニ青年ノ生力ヲ以テ気脉活然タル精神ヲ淘鑄ス」（四屋，1876，4—5）（下線は筆者．以下同じ．）

この原文を図書館で探してみると，当時のアメリカの著作家Mansfield, E.D.（1801—1880）の著書American Education, Its Principles and Elements.で，「之ヲフキジアス……」の部分は以下の英文に対応している．

Would he compare himself with artists—with Phidias or with Angelo ? He is not forming a work like theirs, from the cold marble, lifeless and perishable; but is vested with power to mould a heart warm with the beatings of youth, and direct a mind perennial in freshness and immortal in youth. (Mansfield, E.D., 1869, 92)

このように，youthは当時すでに青年と訳されていたことがわかる．

また，第67号（明治11年5月）の江口高遠訳「新英蘭教育雑誌抄」の「米国諸芸学校」の中に次の文が見出される．

「夫レ諸芸学校ノ主トスル所ハ即チ十六年乃至二十年ノ青年輩ニ附与スルニ其欠乏セル性質ヲ以テシテ之ヲシテ完全ナル工学者タラシムルニアリ」（江口，1878，33）

2　筑波大学外国人研究者，中国青年学院講師　李益文氏による．

第70号（明治11年6月）の浅岡一訳「婦女教育抄」でも青年の文字が見出される．

「又父母ノ其婦女ヲ遇スルヲ観ルニ其青年ノ容姿ヲ変ゼズシテ数十年ヲ保ツベキモノト為スガ如ク唯其艶容美装ヲ求メシメテ以テ玩具トナサント欲スルモノニ似タリ」（浅岡，1878 a，29）

さらに，第75号（明治11年8月）の浅岡一訳「母親ノ心得抄」の中でも「青年」が用いられている．

「小児ハ事物ヲ思惟スルノ性アリト雖之ヲ説話スルヿ能ハザルガ為ニ其才能ノ長所ヲ察スルニ青年子女ノ如ク分明ナラズ故ニ彼ノ学問ノ要具タル目的ノ如キモ小児ノ時ニ於テ之ヲ定メシムベカラズ」（浅岡，1878 b，19）

このように，明治10年前後には，欧米の教育論文の翻訳，紹介において「青年」ということばが用いられていたことが確かめられた．

「明六雑誌」は，明治6年に森有礼の提唱によって加藤弘之，西周，福沢諭吉，森有礼ら当時の錚錚たる学者10名を当初の社員として創立された「明六社」の機関誌であり，明治7年4月に創刊されている（明治8年11月，第43号までで刊行中止）．これは「日本における総合的学術雑誌の始祖」（大久保，1976）として評価されている．

この「明六雑誌」第2号（明治7年4月）では福沢諭吉の「学問のすゝめ」の4編「学者の職分を論ず」をとりあげて論じている．西周は「非学者職分論」の題目で執筆しており，その中に次の文が見出される．

「青年ノ書生僅カニ数巻ノ書ヲ読メハ乃チ官途ニ志ス是名望ヲ得タル士君子ノ風ニ傚フ者ナリ云々此言ノ源由ヲ推ス然ラサルニ似タリ」（西，1874，5）

これは福沢諭吉の文について述べたものであるが，岩波文庫によって該当部分を見ると次のようになっている．

「名望を得たる士君子にして斯の如し。天下の人豈その風に倣わざるを得んや。青年の書生僅に数巻の書を読めば乃ち官途に志し，有志の町人僅に数百の元金あれば乃ち官の名を仮りて商売を行わんとし，学校も官許なり，……（中略）……十に七，八は官の関せざるものなし。」（福沢，1978，40—41）

ここでは論議の内容には立ち入らないが，明治7年に福沢諭吉が青年ということばを用い，わが国西洋哲学の開祖といわれる西周もそれを引用の上論じているところを見ると，当時の啓蒙思想家の間には，青年ということばがすでに通用していたものと考えられる．

明治初期の新聞に見られる「青年」

すでに述べたように，明治初期の新聞用語の調査としては，国立国語研究所の「明治初期の用語」（1959）がある．これは郵便報知新聞の明治10年11月1日から11年10月31日までの1年間について調査したもので，母集団の延べ語数128万語から，行を単位とする層わけ等間隔抽出法により延べ約10万語（抽出比12分の1）を採集し，語彙表を作成している．語彙表はA表（使用度数10以上），B表（使用度数9～1），C表（補充調査で追加した語）によって示されているが，「青年」はどの表にも見当らない．青年に関係した語としては，「少年」「若イ者等」「若者」がB表に，「年若」がC表に入っている．

この結果から，明治11年頃までは「青年」はまだ一般に広く流布するには至らなかったと推論することは自然である．ただ，この調査は約12分の1の語を抽出したものにすぎないので，「青年」は新聞紙上でまだ使われていなかったとまで結論するのは無理である．試みに，われわれが翌年（明治12年，東京YMCA創立の前年）の東京日日新聞について調べた結果，数は少ないが「青年」が使用されていることが確認された．以下にその例を示す．

○　明治12年1月24日

海内果稿「功名ハ速成ヲ期スベカラズ」という論説があり，その中に次の文が見出される．

「此ノ大勲ヲ数秒時間ニ於テ奏セント欲スルハ其レ之レヲ難事ト云ハザル可カラズ今ノ青年志士ガ功業ノ成ラザルヲ慨キ夙志ノ達セザルヲ悲ムハ其ノ学術工芸ノ未ダ卒業セザルガ為トナリト云ハヾ即チ可ナリ若シ一世ヲ利益スルノ大志ヲ懐キ不朽ノ功名ヲ立テント欲セバ少壮ノ人ニテ何ノ嘆息スルヿカ之レアラン」

○　明治12年6月23日

フランス，リヨンのエミル・ギメー氏の留学案内の広告を本文の記事として掲載しており，その中で日本人留学生の問題が次のように記述されている．

「已ニ十六歳ヨリ廿歳以内ノ青年ヲ航セシムル者アリ此青年タルヤ已ニ習学適度ノ質ヲ失ヒ耳目ノ歓楽ニ有限ノ光陰ヲ消シ眼目タル学業ハ帰国ノ際ニ携フルヿ蓋シ少シ」

その他の用例については以下に簡単に紹介する．

○　明治12年9月27日

「……我国青年の書生が学術上に関係するとなれば……」

○明治12年10月13日

「……青年書生ヲシテ悉ク之ニ従ハシメ……」

○　明治12年12月19日

「青年才子の誉れある末松謙澄君が……」

このように，新聞紙上でも，東京YMCA創立以前から「青年」が用いられており，われわれが確認したものだけでも，明治12年の1年間に延べ10回使用されている．

次に，明治13年の東京日日新聞について調べてみると，われわれの確認したものだけで，「青年」の使用回数は14回になる．ただし，この多くは青年会（東京YMCA）の演説会の広告である．青年会はこの年の5月に発足し，5月6日，5月27日，6月25日，8月28日，9月4日の計5回にわたり演説会開催の告示記事を掲載している．また，11月1日，11月12日の2回については，青年会雑誌局による機関誌「六合雑誌」の広告記事が掲載されている．なお，12月には「全国青年詩文会」という，青年を冠した会の広告も出現している．

以上のように，青年ということばは，東京YMCA創立以前にすでに新聞誌上でも用いられていたのであるが，明治13年以降は青年会の広告が一般の人々の注目を惹くものとなったことは十分想像できる．したがって，東京基督教徒青年会が青年あるいは青年会という用語を広く社会に浸透させる上で大きな役割を果たしたことは確かといえよう．

なお，明治14年の東京日日新聞の1月から9月までを調査した結果でも，「青年」ということばの使用はやはり広告が多く，青年会雑誌局の「六合雑誌」の広告が11回，「北越青年親睦会」の開催広告3回，「全国青年詩文会」の広告1回となっており，青年の名称を付した会や組織が一般に広がっていく様子がうかがわれる．

地域の青年夜学会などの成立の時期

村落を基盤として成立していた若者組は，明治時代に入ると，次第にその積極的役割を失い，解体の方向をたどるが，代わって青年会，青年倶楽部，青年夜学会などが各地に成立してくる．

これは，「明治維新以後の社会の急速な変化のなかで若者組は時代にとりのこされ，かつての社交娯楽は年中行事の改廃とともに退廃し，警備・消防の仕事は警察や消防組の手にうつって，若者組の存在意義も明らかでなくなり男女間の風紀頽廃が指弾されるにいたったとき，若者組を更生していくうごきが各地にでてきた」（宮坂，1968，185）ことによる．若者組の改革は，青年自身が自発的に立ち上がった場合でも，「町村長，小学校長，小学教員などを指導者にたのんでいることが多い．また郷土の有志者が指導者となったばあいは志のある青年を集めて青年会，青年倶楽部などとよばれる青年団体を組織するのがつねであったが，かかる青年団体をつくらないで，指導者が夜学会その他の形式で指導することもあった」（桜井，1952，119）ようである．

ところで，青年会や青年夜学会など青年という名称を付した会や組織が最初に結成されてくる時期を明らかにすることは，青年ということばの成立，普及を確認する上で重要である．ここでは，そのような動きが最も早かったと思われる静岡県と福島県の例について検討してみる．

「静岡県教育史通史篇上巻」によると，当時の浜松県では明治9年4月に公立小学校夜学規則を定めている．これは貧困不就学児童の就学率の向上と青年教育の向上を図ろうとしたもので，第1条は次のように示されている．

「夜学ヲ設クルノ旨趣ニアリ一ハ貧家ノ子弟ニシテ家計ノ為昼間小学校ニ従事スル丁能ハサル者ノ為ニシ一ハ青年ノ輩ニテ志アリト雖モ昼間学ニ就ク丁能ハサル者ノ為ニ其便ヲ得シメントス（以下略）」（静岡県立教育研修所，1972，479）

夜学の目的が貧困不就学児童の就学率の向上からやがて青年夜学の方向をたどることになるが，明治9年12月には庵原郡杉山村に杉山青年報徳学舎が創設されている．明治11年に制定された杉山青年報徳学社規則の緒言には，以下のように，村復興のため青年教育をおろそかにしてはならないという考えが強く示されている．

「（前略）青年輩ハ農家ノ種苗ノ如シ，苗木ノ時，良農能ク手ヲ尽シ，曲レルヲ直シ，培養ヲ施ストキハ，成木ノ後良実ヲ得ル必セリ，若シ惰農ニシテ，蒔付ノ侭手入ヲ怠リ，捨作リニスルトキハ我侭ニ育チ，成長ノ後良結果ヲ得ルノ理ナキカ故ニ，青年輩ノ教育ヲ怠ルトキハ，我侭増長シテ，終ニ父兄ノ教訓モ聞キ入レス，各家破産ニ至ルトキハ，本会良法タリト雖トモ，為メニ廃滅ノ不幸ヲ見ルモ知ルヘカラス（以下略）」（静岡県立教育研修所，1972，480）

まさに村の将来を青年教育にかけたものであるが，明治の初期にこのような青年教育が静岡県の農村で実施されていたことは驚嘆に値する．本稿ではその内容に立入らないが，注目すべきは，明治9年に公立小学校夜学規則に「青年」が用いられ，また同年に杉山青年報徳学舎が創設され，報徳学社規則にも「青年」の語が多く用いられていることである．当時少なくとも静岡県内では農村部でも「青年」ということばがすでに通用していたことを示すものと

いえる．

この点は他の資料によっても補足できる．たとえば同じく「静岡県教育史通史篇上巻」によると，静岡県最初の女子中等教育機関である静岡師範学校附属女子模範学校が明治10年7月設置されているが，その生徒募集にあたり県の発した布告には，次のように「青年」の語が見出される．

「(前略) 師範黌中学校ノ設アリテ青年之男子修学之途モ相立候得共独リ青年之女子ニ至リテハ修学ノ志アルモ其場所ナキヲ以テ或ハ東京ニ趣キ女学校エ入学シ又ハ裁縫ノ師ニ従ヒテ僅ニ其一科ヲ修ムルニ過サルモノアリ到底其素志ヲ逐クルモノ稀ナラン(以下略)」(静岡県立教育研修所，1972，475)

また，明治元年の静岡学問所の開設まで遡ると，その編成は青年組と幼年組に分けられ，高等教育と初等教育が行われている．「青年」ということばは，当時から現在とほぼ同様の意味で用いられていたものと推測される．

福島県の例をみると，静岡と同様に，明治9年以降就学奨励のための「夜学開設」の行政指導が行われている．夜学は昼間就学できない児童の救済だけでなく中途退学者等青年に対する初等教育の補充と拡充という側面をもっていた（福島県，1967）ことも静岡県の場合と同様である．

福島県で特筆すべきことは，明治10年代に「青年学校」が設けられていることである．「文部省第六年報」の中の福島県年報を見ると，次のような記載がある．

「(前略) 明治十一年中……(中略) ……管下ニ現存スルハ小学師範校一豫科学校四講習学校一青年学校一小学校本校六百七十分校七十一……(中略) ……明治十年ハ学校ノ総数七百十三校ニシテ之ヲ十一年ニ比例スレハ小学校二十八及青年学校一ヲ増加シ二ノ小学師範学校ヲ減セリ（以下略)」(文部省第六年報，289)

これにより，青年学校は明治11年に1校設置されていることがわかる．同じく「文部省第七年報」の福島県年報を見ると，学事諸則を明治12年5月に更改増補し，小学校は普通と高等の二種に分かつとともに，さらに，「小学科ヲ卒業シ中学ニ入ル能ハサルモノ又ハ長年ニシテ小学ニ入ラサルモノ等ノ為ニハ青年学校ヲ設ケ或ハ各学校ニ於テ適応ノ教科ヲ設ケテ之ヲ授業セシムルヲ法トス」(文部省第七年報，206)と記載されている．また，青年学校仮規則が次のように示されている．

「青年生徒ハ高等小学教科ヲ卒業セシモノ又ハ長年生徒ニシテ小学ニ入ラサルモノノ為メ便宜之ヲ設クルモノニシテ即在学四ケ年トス（以下略)」

「福島県史21」によると，これにより青年学校は明治12年8月に石川町に設立され，続いて三春，須賀川，相馬中村，原町，小高，安達などにも開設されている．なお，明治15年頃より青年学校は次第に廃止されていく（福島県，1967，1161)．

福島県における青年学校設置の事情について，「日本近代教育百年史」では次のように説明している．

「自由民権運動の高揚に対応して，1878（明治11) 年に，『地方三新法（郡区町村編成法，府県会規則，地方税規則)』が交付されたのであるが，それにもとづく第四県会（79年）では，財政上，従来の県立中学校を無用視する傾向が強まり，同年9月，県令布達で四校が廃止されている．これを補充するものとして，公立青年学校が設置されている．その設置理由は，『青年生徒ハ高等小学教科ヲ卒業セシモノ又ハ長年生徒ニシテ小学ニ入ラサルモノノ為メ便宜之ヲ設クル」ことであり，準中学的性格をもつものであった．そのため各地に設置奨励された夜学会とともに，学校教育の補充的学習機関として，これに多数青年が吸収されたのである．」(国立教育研究所，1974，247)

このように，福島県では明治11年にすでに公立の青年学校が1校設置されており，12年以降になると県内各地に設置されるようになる．「青年」ということばは，当時すでに県内全体に広く浸透していたものと考えられる．

また，村落を基盤とした地域の青年会の創設は明治20年代になって盛んになるが，すでに10年代の初めに創設されたものもある．「福島県史21」によると，例えば田村郡瀬川村大倉本郷青年会は，明治12年に学術の研究，風紀の改善，実業発展を企図して創立されており，また，石城郡神谷村青年会塩支部は，明治10年に従来の若者組を塩青年会と改称したといわれている．

以上のように見てくると，「青年」あるいは「青年会」の名称は，明治10年頃から農村青年の間にも広がりつつあったと考えるのが妥当ではないだろうか．

「青年」の意義と年齢範囲

以上，明治初期の雑誌や新聞の記事，青年夜学会や青年学校の創設の事情を通して「青年」ということばが，東京YMCAが創立される以前に広がりつつあったことを確かめてきた．しかし「日本YMCA史」の記述を除くと，青年ということばにどのような新しい意味内容が含まれていたかについては明らかに

されていない。

推測するに，「教育雑誌」で欧米の論説の翻訳にあたって，欧米の青年を江戸時代からの伝統的習俗の中に生きている「若者」や「若い衆」と同じことばで表現するのはふさわしくないという意識があったのではないだろうか．また，福沢諭吉の論は，青年書生がもっぱら官途に志すことを批判し，独立自尊の生き方を説いたものであるが，この場合の生き方も，伝統的な若者や若い衆の生き方とは本質的に異なるものであったといわなければならない．

杉山青年報徳学社規則を見ると，青年を種苗にたとえ，青年教育の重要性を指摘している．多くの青年会が，「町村長や小学校長によって指導統制され，青年たちがかつて小学校で注入された体制イデオロギーを，ふたたび強化されることになった」（宮坂，1968，185）という批判もあるが，杉山青年報徳学社の場合も仮にそのような側面をもっていたとしても，従来の若者組などに見られる弊害を克服し，新しい青年の生き方を確立させようとするものであったことは確かである．福島県における青年学校の設立も，中学校が廃止される中，自由民権運動の高揚の中で触発された青年の学習意欲に対応した，準中学校的な教育の場が求められていたことによるものであった．日本の社会でも若者が新しい存在として認識されつつあったといわなければならない．

若者の新しい姿を表わすには新しいことばが必要である．青年の青は草木の茂ること，草木の茂る時の色を意味している．また若いことや未熟の意にも用いられる．したがって青年は盛んに成長しつつある若い時期ということになろうが，佐藤（1977）が指摘するように，青年は青雲や青春と重なり，人々に文字通り若々しく新鮮な印象を与えたのではないだろうか．

明治20年代になると，徳富蘇峰の「新日本之青年」（徳富，1887）など青年論が盛んになり，また若者組に代わり地域の青年会が各地に創設されるなど，青年ということばは広く一般に浸透していったものと考えられる．

では，当時，青年は何歳から何歳位までを意味したであろうか．欧文を翻訳したものでは，「十六年乃至二十年ノ青年輩」（教育雑誌67号），「十六歳ヨリ廿歳以内ノ青年」（東京日日新聞）などの記述が見られる．また福島県の青年学校は高等小学校卒業後4年となっているので，およそ14歳～17歳で現在の制度でいえば中学校高学年から高校生に相当する年代といえよう．

しかし，東京YMCAの創立に関係した人々はいずれも20代または30代であり，会長に選ばれた小崎は25歳であった（奈良，1959）．青年としてはかなり年齢の高い集団であったことになる．

また，「静岡教育史通史篇上巻」によって明治時代における庵原郡青年団体（部落単位の青年会が過半数を占めている）の会員の年齢範囲をみると，42団体中最も多いのは17歳～30歳の範囲であった．以下5位までを示すと次のようになる．

17歳～30歳	13団体
14歳～25歳	5団体
14歳～30歳	5団体
15歳～30歳	4団体
15歳～25歳	3団体

これらの団体は明治20年代から40年代にわたって創立されたものであるが，創立年代による年齢範囲の差はなく，明治初期における青年の年齢範囲も同様のものであったと推測される．なお，明治12年に創立された福島県瀬川村大倉本郷青年会の会員年齢範囲は15歳～30歳，明治17年に創立された大越村白山青年会は高等小学校卒業より25歳までとなっている（福島県，1967）．他の県も同様の事情にあったことがうかがわれる．

以上のように，当時の「青年」の年齢範囲はかなり曖昧ではあるが，およそ10代の半ばから30歳位までを指すものであったとみなされる．したがって，心理学用語としての青年よりも，かなり高い年齢層の者までを含む概念であったといわなければならない．

要　約

「日本YMCA史」によると，日本語の「青年」ということばは，明治13年に日本最初のYMCA（東京基督教徒青年会）が創立されるさい，young menの訳として最初に用いられたとされている．しかし，その後，藤田東湖などの幕末の儒者が，青年ということばを既に用いていたことが明らかになり，「青年」はYMCAの造語であるという説は否定されている．しかし，幕末以後，YMCA創立までの明治初期において，青年ということばが用いられていたのか，また用いられていたとすればどのような意味内容で用いられていたのか，はほとんど明らかにされていない．

本研究では，明治初期の雑誌，新聞記事等における「青年」の使用状況，地域における青年夜学会の誕生や青年学校の設置の時期などの検討を通してこの点を明らかにしようと試みた．

その結果，福沢諭吉が「学問のすゝめ」の中で青年ということばを用いていること（明治7年），文部

省印行の「教育雑誌」の中で英語のyouthの訳として青年が用いられていること（明治9年），明治12年の東京日日新聞には青年ということばがかなり出現していることなどが明らかにされた．また，静岡県では杉山青年報徳学社が明治9年に創設され，福島県では明治10年代の初めに公立の青年学校が設置されている事実も示された．このように，青年ということばは，YMCA創立以前の明治初期から一般に広がりつつあったことが確認された．

また，青年ということばは，江戸時代からの伝統的な習俗を生活の基盤とする「若者」や「若い衆」とは質的に異なった，若い世代の新しい生き方を志向するものであったことが考察された．

引用文献

浅岡 一(訳) 1878 a 婦女教育抄 教育雑誌, **70**, 21—47.
浅岡 一（訳） 1878 b 母親の心得抄 教育雑誌, **75**, 16—25.
江口高遠（訳） 1878 新英蘭教育雑誌抄 米国諸芸学校 教育雑誌, **67**, 13—33.
福島県 1967 福島県史21 福島県
福沢諭吉 1978 学問のすゝめ 岩波書店
国立国語研究所 1959 明治初期の新聞の用語 国立国語研究所
国立教育研究所 1974 日本近代教育百年史 第7巻 教育研究振興会
Mansfield, E.D. 1869 American Education, Its Principles and Elements. New York: A.S. Barnes.
宮坂広作 1968 近代日本社会教育史の研究 法政大学出版会
望月 衛 1951 青年心理学 光文社
文部省 文部省第六年報 明治11年
文部省 文部省第七年報 明治12年
諸橋轍次 1959 大漢和辞典 大修館
奈良常五郎 1959 日本YMCA史 日本YMCA同盟出版部
日本大辞典刊行会 1974 日本国語大辞典 第11巻 小学館
西 周 1874 非学者職分論 明六雑誌, **2**, 4－6.
落合則男 1984 解説 明治期のキリスト教とYMCA運動 日本YMCA運動史資料集3, 55—122.
落合良行 1987 青年元年 青年心理学研究会ニュース4.
小川利夫・倉内史郎（編） 1972 社会教育講義 明治図書 IIIのII
大串隆吉 1973 青年論の系譜 教育, **294**, 62—68.
大久保利謙 1976 明六社考 立体社
桜井庄太郎 1952 日本青年史 大蔵省印刷局
佐藤喜代治 1977 「青年」ということば 岩波講座日本語月報9, 1－3.
静岡県立教育研修所 1972 静岡県教育史通史篇上巻 静岡県教育史刊行会
THE YMCA 1977 「青年」はYの新造語ではない, 6月1日号.
徳田安俊 1982 青年心理学入門 川島書店
徳富蘇峰 1887 新日本之青年 集成社
四屋純三郎（訳） 1876 マンスフヰルド氏米国教育論抄 教育雑誌, **18**, 1—16.

付記

本稿の執筆を担当した加藤は「青年」ということばの由来に関心をもち，昭和55年頃に明治初期の新聞用語などの検討に着手した．しかし，この仕事は多大の時間を要するため，中断を止むなくされていた．その後，森下が筑波大学研究生の期間に，仕事を引き継いで諸種の資料の収集にあたり，本稿をまとめるまでに至ったものである．

本研究にあたり，日本YMCA同盟の落合則男氏，香川大学商業短期大学部堀啓造氏，一谷聖子氏の方々に貴重なご教示やご協力をいただいたことを記して謝意を表する．

—1988. 9 .30 受稿—